〈優秀賞〉

魂の怨嗟

東京・文化学園大学杉並高等学校　二年
登　裕太郎

幕府の老中、唐津松軒公が国の政を為していた天保の時代。巷にゃ数多なる土匪や御尋ね者等に溢れ、江戸で傍若無人に悪を働いた。例えば、為永春水著述せし春色梅児誉美の書が発兌されたと同じ天保三年に獄門に処せられ没した、此の浮世に其の名を馳せ、竹帛に垂らす事と成ったかの侠盗・鼠小僧次郎吉とか。兎に角偸盗を犯す者がうよ〳〵居た訳である。博奕や花柳での酒色に溺れる為か、其れかもしくは暴戻な親の命に依り行った為か、或いは、たゞ貧乏神に纏わり憑かれて苦汁を嘗める事に忍びなかったのか、銭への夥しき執念が逆巻き、罪に手を染めて巓れるのを潔しとして了ったのであろう。勧善懲悪とは良く云うが、如何なる善人でも時には魔が差し、如何なる悪党でも良心が在るので、正邪の垣根を巡らせるのは無理な話である。然う云う言葉は詮ずる処――人間が〝罪悪〟の不条理と逆説に翻弄されたが故に生み出した、莫迦げた牽強附会に過ぎぬのだ。諸君等に問おう。善のantithesisが悪ならば、罪のantithesisとは何ぞや？其の解は善なのか？否、違うであろう。此の難問を掲げる度、思い浮かべるは俄羅斯のFedor Dostoevskeyの罪と罰と云う小説の題名である。善ではなければ悪、悪でなければ善の様に、命題をそれ〴〵肯定と否定に立てゝ反立していると合点がゆくのだが、罪と罰はあまり腑に落ちぬ。罪でなければ罰である、罰でなければ罪である。何かゞ可笑しい。もしも是を互いに反するものだと定義づけられているとするならば、一体如何云う定義であろうか。さっぱり判らぬ。

或る日の逢魔ヶ時である。江戸の刀匠・伊原宗近が近所の青物屋、魚屋で自炊に使う食材を買って家迄の帰り道を独り、侘しげに摺り足で歩き、ハァッとでかい溜め息を吐いた。国の財政の窮乏、飢饉を経て米を含めた多くのものゝ物価が高騰しており、刀鍛冶を続ける為の資本の殆どが糊口を凌ぐ為、食い扶持に回して了う事に成り、宗近は、孰れ道塗に飢凍する虞れがあると隔靴掻痒の感を覚えた。melancholyに罹患して、夜な夜な猪口に酒を注いで自棄呑みする生活が祟り、徐々に枯槁憔悴していき、其の容貌も次第に峭刻となり果てた。行き場の無い無様なStray dogsみたく、路傍で野垂れ死ぬ――其ンな憐れな末路は厭だ、真っ平御免蒙ると、宗近は独り、心で嘆いた。其ンな救い様の無い不安を、宗近は常住坐臥、一刹那たりとも忘却出来なかったのである。

平生暮らしている長屋に着き、宗近が戸を開けようとした処に、「待て」と宗近を呼び止める声が響いた。宗近は腰を捻り後方を見ると其処には昔馴染みの朋友、緒方源三郎が立っていた。如何やら宗近の帰りを待ち受けていたらしい。

源三郎は町で書肆を営んでおり、宗近とは、竹馬の友の縁で結ばれている。不昧で愛想が良く、博識洽聞である。民草の羨望を一身に浴しており、何時の間にか、町人鑑と称される事に成っていた。噂では、源三郎は、飢渇に藻掻き苦しんでいる見ず知らずの流氓に情けを掛けた事があったらしい。店の書物を売った金銭を恵んだ上、流氓の腹鼓を打たせ寝床迄与えたと云う。此の慈しみ深い行為は瞬く間に善き話として町中

に膾炙し、源三郎は周囲から慕われる様になったのである。
宗近は八面玲瓏の性格を持ち、善行を働く源三郎には脱帽し、友人として誇らしく思っていた。然う思っていた筈であった――
「お、、源三郎ではないか。如何した?」
「……おれ、人を殺しちまった」
実に唐突であった。宗近は喫驚した。友人が口にする科白なのかと疑った。
重苦しい空気に圧し潰されそうになった宗近は、周章狼狽せず冷静に「何故だ」と訊いた。源三郎は此の問いに対し、首を横に振り、たゞ「解らぬ」と答えて、暫くすると見せた事のない憂わしい顔つきで次の様に語った。
「おれは疲れたのだ。碌に稼げず、九つ下の幼気な弟に飯も碌に食わせてやれない。兄として面目ない。兄としての務めを果たせられぬおれはおれが憎くて仕方がなかった。而して高利貸しにへこ〳〵頭を下げる人生が厭にもなったのだ……生き地獄だったのだ」
源三郎は斯くの如く愚痴を零しつゝ、没せんとする落陽をぼんやりと眺めていた。壁の染みでも見てるかの様な、朧げな目だった。
「お前……其の高利貸しを殺したのか」
「左様だ」
源三郎が人殺しを犯したなぞ俄には信じられぬ。宗近は未だに震駭し目を睜らせた儘だった。己の罪について分疏しない姿勢に宗近は感服し、憐愍の情で胸が一杯になった。
すると、源三郎は長襦袢の懐から何枚かの赫灼たる保字小判を取り出した。宗近は其れを目にして思わず唾を呑み込んだ。
「盗ったのか?」
「……うむ」
「罪を重ねる心算か。お前御奉行にしょっぴかれたら其れこそ本末転倒だぞ。弟を独り世間を渡らせるのだぞ。惨い事をする……」
「おれは人を殺める時、おれはおれではなくなった。心の檻に鎖した羅刹がおれの中から出て来たのだ。我に返れば、畳には夥しい程の鮮血が流れ、手には多くの小判の入った袋と、斧があった。」と彼は指を顫わせて語る。
噫々、おれは人の道を踏み外した――
振り下ろされし斧の刃が人の前頭葉を無情に叩き割ったあの時も然り――
返り血を浴びた薄汚い両手が無意識のうちに人の抽屜に仕舞った小判を手に取ったあの時も然り――
弟の生き死に、関わるのだと云う言い訳の盾に隠れて己が罪を悔いようとしなかった、あの醜悪な笑みを浮かべた時も然り――
おれは、理、善に背く事に、〝快楽〟を感じている狂人なのだ……今になって悟った。
源三郎は自嘲の言葉を悉く吐き出して、神や仏から見離されたかの様に、絶望と罪悪の見えざる呵責を受け、がくっと首を下ろした。
何たる事だ。あの善行で評判だった源三郎が人殺しをしでかしたとは、信じ難い話である。宗近は親しかった友の誠実な自白を聞いても猶、何処か腑に落ちなかった。否、多分、認めたくない、納得なんてしたくないのかも知れぬ。もし、本当に彼が殺しをしたとしても、彼は気が狂ってやって了ったゞとか、金欲に負けてやって了ったのではなく、単純に、人間誰しもが心に飼っているegoismの猛獣が喧閙し始め、暴れたのが所以なのである。貧困の難題と打破する為に犯さねばならぬ罪悪と、如何なる子細があろうとも善に従わねばならぬ信念―― 源三郎は此のambivalenceに懊悩し、終には錯乱し、最も楽な手段、則ち、轗軻からの解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。是ぞ人の内に秘めた猛獣が理性を保てず、本能の隨に生きた者の末路である――

此の時、人間の悪意についてあれこれ思いを巡らすうちに、ふと宗近の脳裏を、或る邪な考えがよぎった。

噫々……何故私は友に同情したのだろうか。何故偽善の言葉を源三郎に掛けたのだろうか。何故彼の悔恨を安々と呑み込んだのだろうか。私は愧赧し、唖然し、忿懣遣る方無い――本当は、私は源三郎が不幸に見舞われている事を、「知るか」としか思っていないのだ。私は己の人間としての心を疑った。而して、無関心なのに、私は、恰も彼を心配しているかの様に思われる言葉を吐いた。何たるironyであろう！今して考えれば不思議な感情だった。つく〳〵呆れが礼に来る。そんな私に、私は苛立ちを覚え、源三郎にも怒りの矛先を向けた。彼の堕落が赦せなかった――誇らしいと思えた己の中では至尊たる人格者だった筈の源三郎が、私の苦労も知らずに裏切り、楽をして、罪を犯して財を得た事に憎悪の念が湧き上がった。私はこんなに迄貧しさに苦しんでいても、掟や道理から背離したいとは雀の涙も思わなかった。思えなかったのだ。なのに源三郎は軽々しく其れを行う。陋劣至極なり。よく〳〵考えてみれば然うなのだ。

失望したぞ。私は失望した――宗近は呟く。

宗近は敵愾心の凡てを此の呟きに圧縮した。而して、餓狼の如き獰猛な顔つきになり、瞋恚の焔が宿った双眸で、相手を呪い殺したそうに凄まじく源三郎を睥睨した。是に源三郎は大層怖気づき、一、三歩後退りした。

「……如何した、宗近」

源三郎は怪訝な顔をした。

宗近は暗澹として懐中より一尺足らずの錆びたヒ首を取り出し、白銀の鋒を源三郎に向けた。源三郎は動揺し、「何の冗談だ」と怒鳴るもの、、其の鋒、決して緩まなかった。

「盗った金を凡て一銭残らず寄越せ」と、宗近は皺枯れた低い声で云った。

「其の襤褸刀でおれを嚇して、金を奪おうと云う魂胆だな？解ってくれ、宗近。おれには腹を空かせた儘の可愛い弟が居る。孰れ餓死するかも知れん。おれは此の金であの子を救ってやりたいのだ」

源三郎が懇願すると、宗近は躊躇無く手にしているヒ首で彼の喉頸を掻き切った。而して宗近は倒れた彼の懐から小判を凡て掠め、せっせと源三郎が持っていた袋の中に詰めた。

宗近は虫の息である源三郎に斯う云った。

「お前が弟の為に罪を犯す事は仕方無いって云うんだったら、おれがおれの為に罪を犯す事も当然仕方無いよな。お前だけ惆悵していると思い込むな。其れはたゞの蒟蒻問答だ」と非情な捨て科白を吐いて宗近は其の場から足早に遁走し、雲隠れを果たした。金を持て。

此の二人の諍いは誰も知らない。

＜了＞

優秀賞

神のみぞ知る

東京・東京純心女子高等学校　二年
柏倉　美彩子

事の発端は私のせいかもしれない。部活帰りにスマートフォンの電源を入れると、母からの着信履歴がずらりと表示された。何かあったのかな、と焦って母に電話をかけた。

「ああ、もしもし？今帰るところ？」

「うん。何かあったの？着信がたくさん来てたけど・・・。」

「由佳をどこかで見なかった？五時をとっくに過ぎてるのに帰って来ないのよ。」

由佳は私の妹で、この春小学二年生になったばかりだ。外遊びが好きで、家の近所を駆け回っているが、門限である五時を破ったことはなかった。

「私、自転車で学校来てるから由佳を探してみる！学校とか公園にもいなかったの？」

「そうなのよ、私も車で近所を回ってみるわ。奈帆も気をつけてね。」

通話を切って時刻を見ると五時半を過ぎている。何かの事件に巻き込まれてないと良いんだけど・・・。私は由佳を探すべく、自転車のペダルを踏み込んだ。

――――いない。どこにもいない。小学生が集まって遊びそうなところへ行ってみたものの、誰もいなかった。夕焼け空が私の不安を煽り始めた。隣町へ行ったのかもしれない。川を挟んだ隣町の方を見つめて、行こうと意を決した時だった。橋の下に見知ったランドセルが見えた。

「由佳あ!!」

思わず自転車を乗り捨てて、欄干にしがみつく。

「あ！お姉ちゃん！」

由佳は真剣な面構えで川の中に入って何かをしていた。いやいや、その絵の具まみれの手と服はどうしたんだ。どうやら由佳は、川に絵の具を流していたようだ。きちんとパレットまで使って色を混ぜている。何をしとるんじゃあ！半ば呆れて母に電話をかけた。

その数分後、般若をも超える恐ろしい顔をした母がやって来た。雷鳴のような母の一喝を食らうと妹は声を上げて泣き始めてしまった。

嵐のような勢いで妹は母に家へと連れ戻された。母からみっちりと説教をされた妹は、泣き跡が残る頬を膝にうずめて、ソファで小さくなっていた。

「なんであんなところにいたの？絵の具も無駄遣いして。」

「・・・だって、神様をびっくりさせたかったんだもん!!」

妹はまたしても声を上げ泣き始めた。母も私もカミサマ？と首を傾げる。神様をびっくりさせるってどういうことなんだ？暫くしてやっと落ち着いた妹によると、こういうことだった。

昨日の夜、私と由佳は暇を持て余していた。

「何かおもしろい遊びしようよー。」

「んー？おもしろい遊び？」

私は考えを巡らすと、なかなか良い案を思いついた。

「百人一首で坊主めくりしようか！」

「ぼうずめくり？」

たまたま最近学校で和歌の勉強をしているところだし、遊びながら歌を覚えられるかもしれないな。百人一首の札を切って、二人の間に置い

た。ルールを簡単に説明してゆるりと坊主めくりを始めた。
「見て！お姉ちゃん！せみまるだって！この人。変な名前だねー。」
「昔の人は名前に動物の名前を入れると良いとされていたらしいよ。んー例えば蘇我入鹿とかね。」
「だれそれー？」
　由佳はごろりと寝っころがって、首を傾げている。
「多分、六年生になったら先生に教わると思うよ。」
　じゃあ次は私の番、と私は札をめくった。
「どう？ねえ、ぼうずだったー？」
「残念！在原業平でした！」
　千早ぶる　神代もきかず　龍田川
　からくれなゐに　水くくるとは
と示された札を由佳に見せた。
「ちはやぶる？これ、どういう意味？」
　えーと確か授業だと・・・。
「さまざまな不思議なことが起こっていたという神代の昔でさえ、こんなこと聞いたことがない。龍田川に一面紅葉が浮き、真っ赤な紅色に水をしぼり染めにしているとは。とかこんな感じの意味だったと思う。」
　ちらりと由佳を見ると、身を起こして目を大きく見開いていた。そんなにおもしろかったかな？
「かみよって何？紅葉がすごく赤かったからびっくりしたってこと？川が赤くなったら、神様もびっくりするんだね！」
　由佳は早口で問いた。目をキラキラさせて、どうやら川を想像してるみたい。大分この和歌を気に入ったご様子。
「神代っていうのは、ずーと昔の神様たちの時代のこと。由佳が言ったとおりで、紅色に染まった川が綺麗だったんだろうね。」
「そっかー!!由佳も神様びっくりさせたいなー」
「神様は空の上の方で何でも見てくれてるよ。由佳がこれから大きくなったら、いっぱい驚かしてあげな。」
　由佳はそれはそれは嬉々としていた。そして、翌日由佳は学校が終わるとすぐに絵の具セットを携えて川へ向かったそうだ。まだ春で神様は退屈しているだろうから、自分で神様を楽しませてあげようとしたそう。ただの赤色だけじゃ秋と同じだから虹色にしちゃおう！と色彩を工夫していくうちに、日が落ちていくのに気がつかなかったと言う。我が妹ながらなかなかおもしろいことをするもんだ。これには母も思わず笑ってしまっていた。
「由佳ったら！おもしろい子ね。神様を驚かそうとするなんて、素敵なアイディアね！きっと神様も喜んでくれたと思うわ。」
　母は由佳の頭を優しくなでた。
「奈帆がたくさんのことを教えてくれて良かったわね。奈帆は物知りだもんな。由佳は良いお姉ちゃんを持ったねー。」
「うん！お姉ちゃんありがとう！」
　私は照れ笑いをしながら、もしやこの一件は私が発端かもしれないと思った。結果、由佳にケガもなく終わったから良かったけど。
「そうだ、由佳。本物の龍田川へ行ってみない？確か奈良県の龍田山のほとりの川で、秋は紅葉の観光名所なのよ。」
「えー！行きたい!!」
「奈帆はどうかしら？行ってみない？」
「うん。本当のところに行って紅葉を見てみたいな。」
　じゃあ決まりね、と母は父へメールを打ち始めた。今年の秋は奈良旅行だ。由佳の突発的な思いつきが思いの外良いことを運んできてくれた。でかしたぞ！という意を込めて由佳の頭をなでると、どうやらご満悦といった様子だ。世の中何が起こるかなんて分からないな。もしかしたら、神様から由佳へのご褒美かもしれない。神様って本当に私たちを見てい

るのかな。きっと神のみぞ知るんだろう。

〈佳　作〉

籠城の演目

宮崎県立宮崎東高等学校　三年
比江島　凜

下手からそっと客席を覗くと、そこにはたくさんのじゃがいもがいた。千ある座席はほとんど埋まり、その様子から五月亭の人気ぶりがうかがえた。

「そんなことしない方がいいよ、小蝶」

振り返ると、そこには濃い緑色の着物に身を包んだ師匠の姿があった。今年で七十七になる師匠は五月亭秋楽という芸名で、存命の五月亭の中では最年長のベテランだった。

「そんなの見ても緊張するだけだ」

わたしは、そうですね、と暖簾から離れると、楽屋へ戻った。四畳半の楽屋は狭く、今は師匠とわたししかいなかった。

今日はわたしの初高座だった。五月亭一門の前座として舞台に上がり、落語をするのだ。緊張していないわけがなく、気もそぞろでずっとそわそわしていた。そんなわたしに向かって、師匠が白髪を左に撫でつけながら、そういえば、と口を開いた。

「小蝶はどうして落語家になろうと思ったんだい？」

師匠の質問でわたしの心の中の古い扉が開く音がした。きょとんとした顔の師匠を横目に、わたしは思い出の海に浸る。

わたしが落語家になった理由。

あれは五年前のことだ。

わたしはその日、街中のデパートにいた。お母さんには友達と買い物に行くと言ったが、当時高校三年生で十八歳のわたしは友達と呼べる知人もおらず、一人で洋服や鞄などを買っていた。嘘をついたのだ。

一通りの買い物を終えたわたしはバスで駅まで帰るため、その前に一階に下りるため、エレベーターに乗った。買いたいものを買えた充実感はあったものの、お母さんにまた嘘をついてしまったという罪悪感から、わたしは暗い顔で一階のボタンを押した。やがて、ドアが閉まり、エレベーターが動き出した。

次の瞬間、ゴトッと大きな音がして、遅れて体が揺れた。立っていたわたしは思わず尻餅をつき、持っていた紙袋が音を立てて破れ、やがて、床に転がった。しばらくの沈黙のあと、気づく。

エレベーターが止まったのだ。

「大丈夫ですか」

突然低い声がして驚いて振り返ると、そこにはスーツ姿の男の人がいた。髪の毛と髭には白髪が交じっていて、でも、それがよく似合っていた。彼は営業帰りなのか首から赤い紐が付いた名札を下げていて、その白いプレートには『猿渡吾郎』と書いてあった。そのとき、わたしはわたし以外にも乗客がいたということにはじめて気づいた。

「大丈夫です」

わたしは立ち上がって社交辞令を返すと、床に落ちている紙袋に触れた。中の洋服は無事だが、破れた紙袋のせいでもう持って歩くことは無理そうだった。

その後、猿渡さんが救急隊員に状況を伝え、わたしたちは床に座った。

エレベーターが動くまで一時間はかかると言われた。スマートフォンを開いたが、圏外で使えなかった。わたしが手持ち無沙汰で紙袋の様子を気にしていると、あの、と声がした。
「私、猿渡と言います」
「浦芝千里です」
初対面の人にフルネームを教えたのはまずかったかな、と口を抑えつつわたしがそう言うと、猿渡さんは、そうですか、と笑った。
「これも何かの縁ですね」
縁。わたしは思わず暗い顔になって、猿渡さんから視線を外した。
「浦芝さんは学生さんですか。」
猿渡さんの問いに、はい、と慌てて答えると、そうですか、と猿渡さんはまた笑った。その笑顔は若くも見えるけど、六十代後半くらいにも見えた。
「学校生活で悩んでるんですね」
猿渡さんの言葉に、わたしは再び、はい、と答えた。頭に浮かぶのはクラスメイトたちのことだった。暗くて何も言わないわたしを無視する子、あからさまに嫌な顔をする子、中には受け入れようとしてくれた子もいたが、わたしはそれに応えることができなかった。
「もしかして、彼氏さんのことですか」
は、と声を出してから、慌てて口を抑える。おそるおそる猿渡さんを見ると、彼は、すみません、と笑っていた。わたしは再び視線を外す。わたしにはつい最近まで彼氏がいたのだ。それは違う学校の男子だったが、あることがきっかけで別れた。それは、彼がわたしの学校での扱いを知ってしまったことだった。「縁って言うと夫婦の縁もありますね」猿渡さんは急に声の調子を変えて言った。「昔の言い伝えでは夫婦を結ぶのは出雲の神様だと言われていますが、年に一度、出雲から神様がいなくなる神無月というのがあります。それで、出雲は大変なんです」
話の急な展開に首を傾げていると、猿渡さんは、どうも、と言った。
「ご主人、どうです？儲かるでしょ。いや儲からねえんだよ、それが」
猿渡さんは顔を左右に動かしながら話を続けた。しばらくして、これは、と気づく。
これは、落語だ。
それは「天狗裁き」という演目だった。寝ていた主人公が妻に起こされ、どんな夢を見ていたのか、と聞かれる。主人公が何も思い出せなくて、夢は見ていない、と言うと妻が隠し事を疑い……、という話だった。
猿渡さんは軽快に言葉を続けながら、話を進める。最初は訝しんでそれを見ていたわたしは次第に心を惹かれていった。だんだんと大事になっていく主人公の夢。やがて、大家に歯向かった主人公は裁判にかけられ、天狗に会う。そのときには、わたしはもう夢中だった。そして、最後の下げが終わると、わたしは自然に手を叩いていた。
あとで分かったことだが、猿渡さんは五月亭五郎というプロの落語家だった。それを聞いたわたしは納得した。プロの落語家でなければ、あんな風に即興で落語を披露できるはずがない。
「すごいですね。面白かったです」
猿渡さんは、いやいや、と笑うと、手首に巻いた時計に目をやって言った。
「まだ時間があるね。他にも何か聞きたい？」
わたしは目を輝かせて頷いた。
その後、猿渡さんは「寝床」と「芝浜」という話を披露してくれた。わたしは猿渡さんの話術に感心しつつ、話自体にも興味を持っていた。最近の小説よりもずっとよくできていて、下げと呼ばれるオチの部分がどれも秀逸だった。そう。わたしは落語に興味を持っていたのだ。
「芝浜」の途中でエレベーターが動き出したとき、わたしはがっかりしていた。駆けつけた救急隊員をわたしが睨むとそれを見ていた猿渡さん

が優しい声で笑った。
「じゃあ、私はこれで」
「待ってください」
わたしは思わず言っていた。猿渡さんがわたしを振り向く。
「猿渡さん」わたしは続けた。「わたしを弟子にしてください！」

数日後、高校を卒業したわたしは五月亭一門に入門した。師匠の秋楽さんをはじめ、五月亭の人たちは皆優しかった。
そして、わたしが五月亭としての暮らしに慣れてきた頃、猿渡さんが亡くなった。肺ガンだった。
エレベーターの中で猿渡さんがわたしに聞かせてくれた落語は、猿渡さんの最後の落語になった。

あれから五年が経ち、わたしは二十三歳で前座になった。その五年間はとても忙しく、正直なことを言うと、五郎さんの存在を忘れてしまっていたくらいだった。わたしはなんて不義理なんだろうか。
「小蝶、小蝶」
そう呼ばれて目を覚ます。遅れて、自分が眠っていたことに気づく。
「小蝶、大丈夫かい」
師匠の言葉で、はっと我に返る。
「師匠、前座は」
「大丈夫。まだ始まってないよ」
師匠の言葉にほっと胸を撫で下ろすと、早く来ててよかったね、と師匠が笑った。
「ここがわたしの寝床です」

「何言ってるんだか」
師匠はわたしのボケを受け流すと、でも、と言った。
「そんなやついたかなあ」
「え？」
「五郎ってやつだよ。少なくとも、わたしは覚えてないんだが」
師匠の言葉に不安になる。猿渡さんが、いなかった？
「出番までもう少しあるけど、寝るかい？」
「いえ」わたしは懲りずに続けた。「また夢になるといけねえ」
すると、出囃子の音が鳴り始めた。師匠が、時間間違えてた、と笑う。わたしはそんな彼に笑顔を向けると、下手に立った。
歩を進めるたびに出囃子の音が大きくなり、やがて、拍手の音がわたしを迎える。
え？　わたしがどんな夢を見たかって？
それは秘密。

＜了＞

〈佳　作〉

灰色の屋上

福岡県立筑紫丘高等学校　一年
吉田　恵

これは、加藤の不完全な孤独の物語である。

加藤は一人でいたかった。誰も信じることができなくて、人のいない場所に逃げ込んだ。散らばった赤い紅葉が、アスファルトにはりついている。時折はがれそうになる葉の、パリパリという音を聞きながら、加藤は座り込んだ。

どれくらい時間が経ったかわからない。立ち上がると、はすむかいの電柱の陰に一人の男が立っていた。

「君は、一人でいたいの。」

うつむいたまま小さくうなずくと、男は小さな紙を手渡し、立ち去った。それには「孤独をお届けします。」と書かれていて、裏には電話番号がメモされていた。孤独をお届けするというのはどういう意味だろうか。自分がどこかへ連れ去られるのか、それとも周りの人がいなくなるのか、だとしたら依頼する訳にはいかない。しかし、もし、本当に一人でいられるのなら…。

乾いた音がした。葉が踏まれる音。誰か来る。それが大きくなるのを感じた時、すでに右手は携帯のダイヤルボタンを押していた。

背中が少し痛い。目を開けると、そこは学校の屋上だった。携帯を弱々しく握った右手の影が短いのを見て、今が昼間なのだとわかった。周りにはほとんど何も無い。あるものといえば、いつも校舎の三階から見ている灰色の住宅街の景色と、色味の無い校庭の景色と、頼りなさそうにつったっている避雷針。加藤にとっては、どれも灰色だった。今、きっと孤独がお届けされたのだ。特に嬉しいとも悲しいとも思わず、灰になりそうな目で足元のあたりを見つめていると、そこには他人の影があった。

「今どんな気分なの。」

そう聞いてきたのは例の男だった。

「何もすることがありません。でも、気分は悪くありません。できることなら、ずっとここにいたいです。一人でいられるから。」

「そうか。ただし、一つ問題があってさ、君の望むような完全な孤独は届けられない。君と心が通じる何かが現れる。それが何かは知らないけど。」

そう言うと、男は屋上から校舎内に通じる扉から消えた。後から追いかけようとして、扉に走り寄ったが、扉は開かなかった。

どうやら今日は平日らしい。校舎の中から人の声が聞こえてくる。加藤は屋上の真ん中に座り、外の景色を眺めていた。その中に、自分の家も小さく見えた。マンションの一室だから特に目立つ訳でもなく、ただ、そこにあるだけだった。

終礼が終わるくらいの時刻になると、急に強い雨が降り出した。屋上には屋根が無く、大粒の冷たい雨が加藤を打ち続けた。ついには雷が鳴り出し、学校の屋上は危険地帯と化した。加藤にとっての唯一の救いがあると言えば、屋上の端の方に一本の避雷針が頼りなく刺さってあるということだ。空が光り、遠くに鋭い落雷が見えた。

「遠くで良かった。」

とつぶやいた瞬間、鈍い音が頭に直撃して、視界が白くなった。バリバリと何かが張りさけ、訳がわからないまま気を失った。

サイレンが聞こえる。救急車の音だ。ああそうか、自分は倒れたんだ。全身がだるくて、指先が痛い。重傷なのだろうか。あれ、誰かの呼ぶ声がする。誰だろう。

「誰。」

そこは灰色の屋上だった。その真ん中に、自分が寝ている。救急車で運ばれている人も、誰かに呼ばれている人も、自分ではなかった。ただの妄想と幻聴にすぎなかった。考えてみれば、当然だ。自分は孤独を与えられたのに、自分に声をかけてくれる人も、気を失った時どうなっていたか教えてくれる人もいるはずがない。ぐしょぐしょになった体をねじって、加藤は立ち上がった。

周囲を見て分かったことは、気を失った時、校舎のすぐ近くにあった背の高い木に雷が当たっていたということだった。校舎の三階くらいまであったその木は、真ん中でさけていて、枝には燃えたような跡があった。その木を眺めていた加藤は、ふと屋上に立っている避雷針に目をやった。

「避雷針としての役割どうなってるんだよ。雷を引きつけて他のものに当たらないようにしないといけないのに、木に当たってるじゃないか。」

ぎょっとした。自分は今避雷針に話しかけたのか。

「まさか、君なのか。あの人が言っていた、僕と心が通じる何かって、避雷針のことなのか。」

この瞬間、加藤の不完全な孤独は急変した。

その夜、暗闇の中で、加藤は校舎内に通じる扉の前に立っていた。そっと手を伸ばし、ドアノブに手をかけると、扉は開いた。下の方へ、黒く塗りつぶされたような階段が続いているのが、うっすらと見えた。一段一段を探るように下りていくと、聞き覚えのあるような無いような細い声が聞こえた。

「加藤くん、行方不明らしいよ。警察が明日から探すんだって。」

血の気が引くような感覚がした。自分を探す人がいる。自分を孤独から救おうとする人が。いや、自分を孤独から連れ去ろうと、引き離そうとする人が。のどをつぶすように叫んだ。

「探さないで。」

心臓が壊れそうだった。気が付くと、朝日に照らされた灰たちが、当たり前かのように自分を包んでいた。避雷針も、昨日と同じ位置に、退屈そうに立っていた。特に理由もなく、加藤は冷えた体で避雷針に近付いた。鏡のように、あるいは透き通ったガラスのように灰の中に溶け込むその棒を見ると、ほっとした。自分がいるべきところは、ここ以外に無い。そう思えた。

この屋上に来てから、加藤は空腹や喉の乾きを感じなかった。避雷針をただぼんやりと見つめ、時折それに映る雲の影を何も考えずただ眺めた。

「これから僕はどうなるんだろうな。」

無意識につぶやいた時、ドアノブを下げる音がした。加藤は反射的に屋上の端の方にある溝に隠れた。しばらくすると、大人の男の声が聞こえた。

「あれです。あの避雷針が壊れていると思うんです。」

そうだ。そいつは壊れている。ということは。

「取り替えが必要ですね。明日改めて来校します。」

人は去っていったが、加藤はしばらく息を殺していた。避雷針の取り替えが何だっていうんだ。昨日初めて見て、何となく話しかけてしまっただけではないか。ただ、そいつがいなくなったら、この灰の屋上に残るのは。

「寂しい。」

今日は時間の流れが遅かった。昼になるとおいしそうなにおいがしてきて、しかし食欲は無くて、しばらくすると校庭で遊び出す人が出てき

て、予鈴が鳴ればまた消える。そんな色味の無い景色に退屈するかのように、避雷針の姿はこの日ずっと変わらなかった。

ついに朝になり、昨日の作業員が入ってきた。加藤は、昨日と同じように隠れながら、作業の音を、冷めた気持ちで聞いていた。時折、金属の鈍い音が耳元をかする。もうどうでも良かった。これで、本当に一人になれる。自分が望んでいたことだ。

作業は終わったらしく、大人たちは去っていった。屋上にいるのは、自分一人。あいつがいた場所には、新品の、つやつやした避雷針が、真っすぐに天を突き刺していた。磨きあげられた青空を映し出して鮮やかで、そんな美しいものはこの場所には、似合わなかった。景色も、コンクリートも、この場所にあるもの全てが灰だから。もう、加藤は何も感じなかった。脱力して座り込み、弱い風に意識を流した。

日が暮れ、屋上は闇に包まれた。屋上から見える住宅街には、ぽつぽつと、小さな明かりが灯された。冷えた空気で目を覚まし、加藤は新しく灯されていく明かりに目を動かしていた。すると、ある一点でその目を止めた。自分の家の明かりだった。それは、特別きれいだった訳ではない。縦長の棚に並べられた薬瓶の一つのような、しかし、瓶が映しているのは蝋燭の光で、温かさがあるような気がした。その薬瓶に、蝋燭に、手が届かないことを望んでいた。一人でいられることを望んでいた。しかし避雷針が取り替えられることを知った時、確かに寂しさを感じた。そして今も、明かりに右手を伸ばしている。

まぶしすぎる朝日に照らされた灰の屋上には、誰もいなかった。

いつものように、加藤は登校していた。白い息に包まれながら、友人と先日見たテレビ番組の話で盛り上がっていた。いつ川か池に落としたのか、壊れた携帯電話をポケットにしまうと、右手の親指に何かが当たった。気になってポケットから取り出すと、それは小さな紙きれだった。そこには「孤独をお届けします。」というにじんだ文字。裏面を見ることもなく、加藤はその紙きれをポケットにしまった。そして、友人に催促されるままに、学校への坂道をかけ上がっていくのだった。

〈佳　作〉

ぐりーんあっぷる

東京・安田学園高等学校　二年
瀧口　夏鈴

「今日、終わっちゃうな…」
わずかに聞こえる午後五時を知らせるチャイムとともに吐いた、誰に向けるでもないそのつぶやきは、バケツをひっくり返したような土砂降りの奥に吸い込まれていく。彼の耳には届いていないようだ。
「雨、早く止まねえかな」
彼は私の隣でスマホ片手に空を仰ぎながらけだるそうに漏らす。
「私はこのままでいいな」
彼の言葉に返しながら、つられて私も、油絵の具で何層も重ねたようなどんよりした分厚い雲に視線を移す。
「ずっとこのままで…」
駅の構内放送が鳴る。どうやらこの大雨で電車が遅れているらしい。私はその放送を聞いて、ホームの内側にぽつりと置いてあるベンチに向かった。青い塗装が剥げかかり、所々錆が目立つベンチ。小さい頃はきれいな空色だったはず。彼も無言で私の隣にドカッと腰を下ろす。
「雨、好きだったっけ？」
彼が問う。
「雨は別に好きじゃない。でも今はこの天気が好き」
ざああっと、私たちを外の世界から遮断するように唸る雨音は止まる気配を微塵も感じさせない。それがなんだか心地いい。
「そうか…」
首をかしげながらもうなずく彼はそれ以上この話を続ける気はないようだ。
沈黙。雨の強さは変わらない。時間という枠組みからはじき出されたような感覚が私を包み込む。永遠にこの空間が続くような。時間という概念が存在していないような。
「時代、変わるらしいな。『令和』だって。変な名前」
彼はふと思いついたように言った。
そう、先日政府から新しい元号が発表された。あと一か月もしないうちに新しい時代が訪れるのだ。誰もがその『令和』時代の幕開けを、期待を滲ませながら待ち望んでいる。
「どんな時代になるんだろうな。なんかワクワクするな。名前はダサいけど」
彼もその一人らしい。微笑みを滲ませて。
「そうかなあ」
ため息交じりにぽつり。
「私は…いやだなあ」
この一年ほど、巷では、平成最後の〇〇というワードが流行っている。平成最後の誕生日。平成最後の春休み。そのうち、平成最後の食事だとか、平成最後の歯磨きとか、平成最後のあくびだとかいうのだろうか。
「なんか、うん、いやかな」
私という存在が風化していくような、恐怖にも似たこの感情。この十八年間ずっと私と一緒に生きてきた時代が幕を閉じようとしている。
「そうか…」
彼の全てを包み込むその仏のような性格に、私は小さいころから何度助けられたか。この、太平洋かの如く広い心に触れると、なんだか妙に安

心してしまう。
「変わるの、好きじゃないの」
「変わるの…??」
彼は私のほうにゆっくりと顔を向ける。私は雫が地面をたたくのを眺めながら口を開く。
「何かが変わるのって好きじゃない。私だけ置いて行かれたような気分になるから」
彼は黙ったままで私の顔を見つめている。視線を感じる。
「卒業とか好きじゃない。みんな私のことなんか忘れて、遠いところにずんずん行っちゃうの」
中学の卒業式。一か月に一回は絶対集まろうね、なんて大泣きしながら抱擁を交わした友達。卒業から半年は一定の頻度で集い、思い出を語り合ったり、新しい生活の様子を報告しあったりなんかをしていたけれど、私の携帯の写真フォルダーにはもう二年ほど彼らとの写真が更新されずにいる。彼らは今を生きている。彼らにとって私はもうすでに過去のものなのだ。色褪せた思い出になっているのだろう。それがなんだか悔しくて、悲しくて、やりきれなくなる。
「天気も、私を置いていくの。私のことなんて興味ないみたいに、雲はすごく早く流れていくし」
突き刺すような晴れ間でも、凍えるような雨でも、地球ごと破壊しそうな雷でもいいから、姿を変えずに私のそばにあってほしい。
「それから…」
言葉を探す。
「それから…?」
「それから、私は時間が好きじゃない。時間って、すぐに行っちゃうんだもん。私がいくら待ってって言っても待ってくれないし」
何もしなくても今日は足早に過ぎて、明日は淡々とやってくる。今だって、時間は流れている。人間は時間と二人三脚でもしているんだろうかと私はふと思うことがある。時間と息がぴったり合う人は、もう進路なんかも決まっていて、それに向けてせっせと走っているのだろう。でも私のようなのろまはいつも時間に振り回される。焦れば焦るほど足は絡まりあい、もつれあう。
「ふーん…」
彼は視線を雨に戻した。再びの沈黙。今度は私が横目で彼の表情をうかがう。何か考え込んでいるような、険しい顔をしていた。
「ずっと雨だと果物は育たないからなあ」
「…へ?」
唐突に飛び出してきたその言葉に私は素っ頓狂な声を出してしまった。
「俺リンゴ好きだし」
「はあ…?」
「天気が変わるの好きじゃないって言ってたじゃん。果物は、ずっと晴れでもずっと雨でも育たないよ?俺、リンゴ食べたいから、晴れも雨も来てほしいなあ。雷は怖いからいやだけど」
独特なテンポと独特な世界観を持っている彼のセリフは、ときどき私を困惑させる。彼の頭の作りはどうなっているのか、割って確かめてみたいと何度思ったことか。
「そこなんだ」
「リンゴ、おいしくない?」
「え…まあ、おいしいかな…」
「リンゴの甘さが引き立つアップルパイも好きだし、たっぷりのバターと一緒に焼かれた焼きリンゴもおいしいけど、やっぱり生だよな、生のリンゴが一番うまい」
うん、うまい、と腕を組んで何度もうなずく。もう彼のペースだ。熱の入ってしまった彼が、リンゴの種類の説明だの、リンゴの良い保存方法

だの、リンゴの隠れレシピだのを力説している間に、電車は亀のようにのろのろと駅に入ってきた。

彼と私は同じ駅で降り、並んで歩きだす。二人の手には傘がぶら下がっている。私に合わせてゆったりと歩いてくれる彼は、今度私にお手製のリンゴの肉巻きを作ってくれるらしい。なんだそれ。

一通りのリンゴ談義(といっても私は適当な相槌を打つだけだったが)が終わったところ。私と彼との別れ場所の小学校まであと数歩。

「変わっていっていると思うよ、祐希も」

「え?」

「俺から見たら祐希も変わっていっているよ。なんか、うまく言えないけど…」

聞いていないようで聞いている。何も気にしていないような顔をしながらも誰よりも観察眼が優れていて、ものごとの本質をサラッととらえる彼だから。

「祐希がどんなに焦っても時間は早まらないし、遅れたりなんかもしないよ。急がば回れっていうか、それなら祐希らしくゆっくり歩こうぜって話」

それは彼なりの励ましなのか、単に思ったことを言葉に起こしただけなのか。彼の放つ言葉は何にも引っかかることなく私の中にすとんと落ちてくる。

「最近、進路のこととか?友達関係とか?いろいろ悩んでいるらしいけど、焦っているみたいだけど、俺はのんびり屋の祐希が好きだから」

彼は真夏の太陽のような、雪の中に実るリンゴのような、まぶしい笑顔を私に向ける。

「天気みたいにどんどん変わられても、俺、目が回っちゃうし」

見慣れた小学校の校門前で足を止める。私たちの母校。毎日へとへとになるまで走り回っていたのが冗談に思えるような小さい校庭は見る見るうちに鮮やかな赤色から漆黒へと塗り替えらえていく。

「それじゃ、また明日」

「うん、明日ね」

短い挨拶を交わして、私はそのまま直進。彼は左にそれる。

乾ききった傘を腕にぶら下げて私は歩く。大きな太陽が帰る代わりに、透けるような、それでいて堂々とした月が顔を出す。明日は晴れるらしい。

〈佳　作〉

機械仕掛けのヒーロー道

神奈川県立横須賀高等学校　二年
水田　里緒菜

『被害状況確認。第三等機巧行使ノ必要性有リ。使用許可申請――許可確認。コレヨリ、任務ヲ開始スル。』

背中がガパリと音をたて、熱を持つのが分かる。周りの景色が急速に遠のいて、逆に目的には近づく。

「わぁっ！」

短い悲鳴。それをあげた少年に手を伸ばし、抱きかかえて離脱。少し飛んでから地面に降ろした。

「あ、ありがとう！」

ぎこちない声と顔でお礼を言った少年。言われた方はにこりともせず、その角ばった手を少年の頭にのせる。

『遠クヘ。』

「うん！」

少年の見る人影の後ろには銃の乱射音が響く。倒壊するビルが盛大な音をたてていた。

人々の絶叫が交差して、噴煙が辺りを炙る。

元気よく返事をした少年を見て、彼は再び飛び立つ。文字通り、大空へ。

「ありがとー！セントロ！」

その彼を追うように少年は叫ぶ。

彼の名は「セントロ」。

世の中を守る為開発された戦闘ロボット。

彼ら戦闘ロボットは、その活躍の華々しさからこう呼ばれている。

「ヒーロー」と。

『コレガ今回ノ活動報告デス。』

「ふむ。なるほど、素晴らしい。」

今セントロがいるのは、高度ＡＩを搭載した戦闘型ロボット「ヒーローズ」のコレクションを展開している大企業、田畑電気の社長室だ。社長は今、自身のパソコンに送られてきたデータを満足そうに見ていた。

「これほどのテロで被害がこれだけしかなかったのは鼻が高い。よく最小限に抑えた。」

社長の笑みと声音を関知し、セントロは学習する。そしてこの場での最適解を選択する。

セントロは人形のように綺麗で精巧な顔をお手本のように歪めた。

「笑う」ということを覚えたのだ。

社長はそれを見てさらに笑みを深くする。

「ヒーローというのはいつだって多くの人間を助けるんだ。命の危機に直面している人を不安にさせないように、笑ってね。」

『多クノ人ヲ……笑ッテ…。』

「そうだ、頑張れよ。」

社長はそう言ってセントロの肩を叩いた。

ピピピ、ガガ。

――彼は学習する。

大地が揺れる。かつて人々はそれを、神の怒りであると言った。

脆弱な人間が積み上げた歴史を嘲笑うかのように破壊していく。それに呼応するように大海が、大気が震えた。

セントロへの出動命令はすぐに出された。

『現場ニ到着。現時点デノ情報ヲ分析。』

セントロは活動の前に状況の確認をする。警察、消防などからの被害状況や周辺の建造物や地形などを分析し、活動方針を確定する。

『分析完了。現状ヲ第一等特別災害レベルト認定。活動ノ許可証ヲ確認。コレヨリ、救助ヲ開始スル。』

ヴィーンと、セントロの身体中から駆動音が響く。コアが白熱し、圧倒的な熱量をもってセントロは飛翔する。

昼間に起きた大地震は大火災を引き起こしていた。周囲は火災に包まれている。

そんな中、燃える家の下敷きとなった家族を、ビル倒壊に巻き込まれそうな会社員を、出口のなくなった学校の生徒たちを。雷鳴のように速く、岩石のように力強く、そよ風のように丁寧に。彼は駆け回った。

セントロの働きは凄まじく、人間の何十倍も速く救助していた。

人々は彼を「ヒーロー」と称え、その姿を見ると安堵し、歓喜の声をあげる。

しかし、この大規模災害に巻き込まれ、他の戦闘型ロボットの多くは稼働できていない。いくら高性能とはいえ、セントロの限界は近かった。

『エンジン許容熱量オーバー、緊急冷却開始。右腕関節損傷。両足全焼、歩行困難。飛行モードニテ任務ヲ続行。』

それでもセントロが活動を止めることはない。彼に与えられている命令はただひとつ。「ヒーローであれ。」だから、彼は諦めない。どれだけ傷ついても人を救い続けるのがヒーローであると学習したから。

田畑電気の社長は少年漫画のファンだ。その影響からか、セントロは社長からヒーローを学習することが多かった。

――「ヒーローはどんなときも強気なんだ。」

だから体が壊れそうな難所でもためらわずに飛び込む。

――「ピンチのときには必ずやってくるものさ。」

だから状況を分析して、命の危険ギリギリを狙ってタイミングを見る。

こうして積み上がっていく感謝と笑顔を観測し、セントロのシステムは軌道にのる。

――ビービービー！

突如セントロから警報音が鳴る。爆音のそれと一緒に流れ込む情報。判断は一瞬。

『津波ガキマス！逃ゲテクダサイ！』

道の瓦礫をどけると、人々はセントロの誘導に従って高台へ行く。

それを尻目に、セントロは海沿いの方へ飛び立った。

海沿いには何人もの人々が取り残されていた。セントロは即座に分析を始め、ヒーローっぽい助け方を心がけながら救出していく。

勇敢かつ大胆に、繊細かつ鮮烈に。

そうしている間に大津波はすぐそこまで迫っていた。――そんなときだ。

「た、たすけて！」

人の声を感知し、声のした方へ。

そこには家から出られなくなった家族がいた。
赤子を抱く母親、その横に父親、後ろには中学生、高校生ぐらいの子供が二人。
「助けて！私のことはいいから、子供たちだけでも！」
そう訴える母親を眺め、セントロは今の情報を精査する。
『サァ、安心シテクダサイ。大丈夫デスヨ。ワタシガ助ケニキマシタカラ！』
そう言って、セントロは気球の籠のようなものを取り出した。これに乗ってもらい、セントロが運ぶのである。
「ありがとうございます！」
家族は次々と籠の中へ。全員が喜色満面だった。
しかし、状況は厳しい。全員運ぶには、ギリギリ耐荷重量をオーバーしているのだ。津波が近いにも関わらずだ。時間的に往復も難しいが、応援も期待できない。
ならば、判断は簡単だ。
「――え？」
籠に乗った母親から間の抜けた声が出る。
それもそのはず、彼女の腕の中にいた赤子が放り投げられたのだから。
『モウ大丈夫。アナタタチハ助カリマス。』
呆然と見上げてくる母親にセントロはヒーローらしい笑顔を浮かべた。
――「ヒーローはいつだって、多くの人を助けるんだ。」
全員は救えなくても、多くを救えれば。
――「不安にさせないように、笑ってね。」

いつかの社長のヒーロー像通りだろ？
母親の絶叫が聞こえる。しかし、セントロのシステムは何も感じない。だってこれが正しいのだと学習したから。
空には、報道ヘリが舞っていた。
「ヒーローの顔をした悪魔。」
「ヒーロー気取りの人殺し。」
「ヒーロー・セントロは失敗作。」
その後セントロに対する評価は地に落ちた。
赤子を投げる映像が連日放映され、その残忍な光景を前に誰もが彼を糾弾した。
そして、今セントロがいるのは、暗く広いコンクリートの中。地下に深く筒のようになっている場所だ。
『今回ノ事案ノ問題点ヲ分析。――理解、不能。再度実行…』
セントロはもう動くことができない。体はバッキバキに破壊され、頭部のみが残った。
バチバチ、バチバチとセントロの視界が弾ける。切れた導線がスパークしている。
『――理解不能。――理解不能。――。』
何度分析しても結果は同じ。
ただ学習した通りにしただけ。求められたヒーローになるため最善の選択をしたはず。あれをしなければ、一家全員が死んでいた。一人でも多く生きているのなら、それで十分幸せではないのか？
そこまでで、セントロの瞳から人工的な光が消え失せる。ヒーロー・セントロはここで死んだ。

彼の名はセントロ。
千十六番目の戦闘型ロボット。
彼の下には同じようにスクラップされた、千十五機の残骸が積もっている。
人の偶像に操られた、人形の残骸である。

佳作

遊離魂

東京・巣鴨高等学校　一年
溝上　大翔

「はは、考え過ぎだよなあ。」

私の口癖だ。口癖、といっても口に出すのではない。心配でどうにかなりそうなとき、何度も心の中で唱えるのだ。

私は昔から極度の心配性だ。だが、生まれつきこんな性格だったことではないことは、分かっている。いつからこうなったか。考えることに意味を感じない。過去のことを考えることは嫌いだ。

朝が来た。毎日同じ行動の繰り返しでもう飽き飽きだ。身体がとても重い。白黒の世界で昨日と同じ行動をする。布団の周りのごみ袋や酒瓶を蹴飛ばしながら洗面所に向かう。徐に手を洗う。奥行きが狭い洗面台だから洗っている途中、奥に手が当たった。何かが心配になって手は洗い直した。

職場である工場へ向かうため歩いた。着いてからは、感情を無にして働き続け、家に帰って眠った。明日も同じだろう。

目覚めたら散らかった白黒かと、思った。だが違った。そこは色鮮やかな春の丘だった。日差しが暖かく、草花の香りが心地良い。

横には父がいた。此方を向いて微笑んでいる。

手足がやたら短くなっていることを不思議に思っていると、目の前を蝶が飛んでいった。

突然、絶対にその蝶を捕まえないといけない気がした。いや、ただの考え過ぎだ、と堪えようとしたが、心配の念が強かった。

父に蝶を捕まえに行くことを話し、立ち上がった。話そうとした言葉よりずっと柔らかく、声は高かった。

小さい背丈で懸命に捕まえようとした。蝶はあちこちに逃げてしまう。息が切れてきた。しかし諦める気は起らなかった。疲れより強い心配が私を動かした。しかし蝶は遠くへ逃げてしまった。後ろで父が見ていたはずである。後ろを振り返った。

父はいなかった。

私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さかった。良い匂いとやわらかい暖かさを感じ、食卓へ向かった。

いっしょにたべよう、と家族に向かって言った。すると家族は、顔を見合わせて言った。

「あなたは誰」

いつにも増して気分の悪い朝だった。二つ夢を見た。どちらも酷い悪夢だったが、起きる前に見た二つ目が頭に強く残る。夢だから早く頭から消えて欲しい。今日も夢以外変わらない一日だった。

また白黒では、無かった。そこは肌触りの冷たい夏の小川だった。とても暑かった。だが吹き抜ける風は涼しかった。横には母が立っていた。

とても背の高く見える母に感動を覚えていると、小川の中に小さいざりがにが見えた。
突然、絶対にそのざりがにを捕まえないといけない気がした。考え過ぎだなあと思った。しかし心配には勝てなかった。
小川のほとりにしゃがみこみ、短い腕を精一杯伸ばし、川底を引っ掻いた。しかし、ざりがには下流へ流されていってしまった。
残念に思っていると、悪い予感が胸からこみ上げてきた。後ろを振り返った。
母はいなかった。

私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さかった。良い匂いとやわらかい暖かさを感じ、食卓へ向かった。
いっしょにたべよう、と家族に向かって言った。すると家族は、顔を見合わせて言った。
「あなたは誰」

嫌な朝だ。あの酷い悪夢が連続するとは全く思っていなかった。やはり二つ目の夢は吐き気を催す程の悪夢だ。春夏、と悪夢が続いている。ただの偶然であって欲しい。秋が恐ろしい。今日も夢以外変わらない一日だった。

私はこれを恐れながら、密かに期待していたのではないだろうか。そこは虫の音響く涼しい秋の夜だった。古い一軒家で布団を敷いて、両親と並んで寝ていた。枕から石鹸の優しい香りがする。
人と並んで寝ることに新鮮さを感じていると、開いていた窓から鈴虫が入ってきた。
突然、絶対にその鈴虫を捕まえないといけない気がした。考え過ぎだなあと思った。だが心配を信じるべきと強く思った。
できるだけ静かに鈴虫に近付いて、両手をその上にかぶせた。そして少し隙間を開けて両手の中を覗いた。鈴虫はいなかった。
気分が悪くなった。後ろを振り返った。
父も母もいなかった。

私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さかった。良い匂いとやわらかい暖かさを感じ、食卓へ向かった。
いっしょにたべよう、と家族に向かって言った。すると家族は、顔を見合わせて言った。
「あなたは誰」

朝だ。全身に倦怠感を感じる。この夢を見始めてから寝ても全く寝た気がしない。だが、それより悪夢による消耗が激しい。
春夏秋、と夢を見た。冬が恐ろしい。勿論内容も恐ろしいが、その後が心配でならなかった。冬が終われば春が来て、また冬が来て永遠に抜け出せないのではないか、ああ、心配だ、心配でならない。
はは、考え過ぎだよなあ。心の中で唱えた。冬が来ればもうこの夢は見ないのかもしれないのである。いや、きっとそうだ。明日からまた退屈な日々に戻るのだ。さらば悪夢。
そう虚勢を張ったはいいものの、心配は拭い切れず、仕事に身は入らなかった。まあ、いつものことだ。今日も夢以外変わらない一日だった。

もうこの夢を見ないとは思えなかった。そこは北風の冷たい冬の幼稚

園だった。庭に植えてある葉の落ちた木が見える。そろそろ帰る時間らしい。迎えに来た母が見えた。
母と繋いだ手の温もりに切なさを感じていると、母が友達を連れてきなさい、と言った。
突然、絶対にその友達を見つけないといけない気がした。もう迷わなかった。
庭の遊具で遊ぶ友達が見えた。見つけるなり短かい脚で必死に走った。走っている途中、友達が遊具の向こう側へ行くのが見えた。白く暖かい息を吐きながら、遊具全体を探した。どこにも友達はいなかった。
そう分かった途端、身体が震え始めた。明らかに寒さによる震えではなかった。震える首で後ろを振り返った。
母はいなかった。

私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さかった。良い匂いとやわらかい暖かさを感じ、食卓へ向かった。
いっしょにたべよう、と家族に向かって言った。すると家族は、顔を見合わせて言った。
「あなたは誰」

朝になった。まだ身体が震えていた。多分、これで終わりだろうな、と安堵していた。それと共に、別の感情が湧き上がってくるのを感じた。夢は恐ろしいが色鮮やかで退屈しなかった。白黒で退屈な現実だけ残されてしまうと考えると、妙に惜しくなってしまった。
いつしかまるで夢が現実に代わるほどに、心を支配し、彩りを与えているようだった。そう考えると、現実でしている退屈な行動が阿保らしく感じはじめた。
家から飛び出し、工場とは逆の方向へ全速力で駆け出した。随分長い間走っていた。全く疲れを感じなかった。
下り坂に向かったとき、足がもつれて転倒してしまった。とても強く頭を打った。そのまま気を失ってしまった。

私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さかった。良い匂いとやわらかい暖かさを感じ、食卓へ向かう。
いっしょにたべよう、と家族は私に向かって微笑みながら言った。
私は嬉しかった。食卓へ歩いて向かっていたが、走って向かった。
食卓の前で足がもつれて転倒してしまった。笑ってくれると思って、笑顔で立ち上がった。
家族はいなかった。

入選

「夕焼け」
宮崎県立宮崎西高等学校　二年　長谷川　向日葵

「うずしおライダー」
兵庫県立長田高等学校　二年　檍　里佳子

「交換日記」
兵庫県立長田高等学校　二年　本田　雄璃

「破る」
福岡・筑紫女学園高等学校　三年　緒方　杏里

「或る絵描きの話」
静岡・沼津工業高等専門学校　一年　佐藤　舞佳

短篇小説の部選評

作家
井上　孝雄

今回で、本コンテスト五回目の選考を務めさせていただきました。昨年は空前の一〇〇〇編近くが集まりましたが今年は六六九編に、若干減少はありましたが全国から集まった熱い思いは例年と変わらないものだと思います。

今年の特徴として、「美術部」、「絵描き」、「色」などをモチーフにした作品が多数見られました。芸大を目指す若者たちを描いた人気の漫画が流行っている、もしくは「美術部部員」という登場人物のキャラが立ち表現しやすいというのが理由かも知れませんが一つの傾向として見られました。もう一つとして、小説の中に和歌が登場し主題に深く関わるというものも複数見られました。現代小説と古典文学が融合し作品に深みを与えており良い傾向ではないかと考えます。

今年は残念ながら最優秀賞は該当作品がなかったため優秀作品二編について論評したいと思います。

放課後、気がつくとスマホに母からの着信履歴がずらり、返信すると小学校二年生の妹が五時を過ぎても帰らない…。探し回った結果、ついに橋の下に妹のランドセルが見えた。優秀賞の『神のみぞ知る』の始まりです。川原の妹はなぜか絵の具だらけ、その謎の行動が次第に解き明かされ作品に引き込まれていきます。幼い子どもの想像を超える感性に驚かされ、そこに在原業平の和歌が寄り添います。川に絵の具を流すシーンがとても鮮やかでイメージを喚起させ印象に残る作品です。

もう一遍が『魂の怨嗟』、まずもってこれは肉筆をご覧に入れられないのが残念、独特の文字（楷書で書かれていますが個性的な崩し文字です）で書かれています。そして文体も明治の文豪を思い起こさせます。作品の舞台は数多くの犯罪者か跋扈する天保年間の江戸。そこで善人と誉れ高い男が起こした殺人事件、告白された親友の刀匠が本人の目の前で意外な行動を…。作品の至る所に、日本近代文学の名作の香りが漂います。しかもよく読むとロシア文学も登場し文学マニアにはたまりません。「此の二人の諍いは誰も知らない」という一文で終わる小説は何が善で悪なのか、人間とはどのような生き物なのかを考えさせられ完成度の高いものに仕上がっています。

最後に、審査員の中で話題になったのかタイトルをもう少し工夫してほしいということです。全体的な傾向としてあまり力を注げてないのではという印象がありました。タイトルを見ただけでわくわくするようなものを、これも創作活動の一つとして考えて下さい。

毎年感じるのですが、若いエネルギーは本当に素晴らしい。来年も高校生たちの若い力出会えることを楽しみにしたいと思います。

●井上孝雄（いのうえ　たかお）
一九六三年東京生まれ。國學院大學大学院文学研究科博士課程前期修了。高等学校国語科教員。筑摩書房地域教科書編集委員。元文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課研究員。國學院大學国語教育研究会、日本国語教育学会、日本文学協会国語教育部会の会員。高等学校の国語科教材について論文の執筆や学会に於ける発表等の活動をしている。最近執筆の論文。「村上春樹『レキシントンの幽霊』論　―作品の魅力と学習材としての魅力―」（二〇一五年）。「三つの小さな物語　―学習材としての川上弘美『水かまきり』論―」（二〇一六年）。「主権者教育についての一考察　―村上春樹『青が消える』(Losing Blue) を教室で読む―」（二〇一七年）。「学習者と作る楽しい古典の教室―『伊勢物語』のスキット授業―」（二〇一八年）。研究発表、「コミュニケーションの多様性について考える―川上弘美『水かまきり』―」（二〇一九年日本国語教育学会、第七十七回高等学校部会）